「盤瓠」（『捜神記』）の受容について

Receipt of The Banko of Soujinki

＊善塔　正志

Masashi Zentoh

ABSTRACT

The Banko of Soujinki is in the textbook of Japanese. There are a lot of interesting points of the influence on Japan etc. though this is exceptional as the Chinese writing teaching material. As a result of thinking about its how to receive it through Miwayamadensetu, Hebimukoiri, and Hakkenden, the difference in each age is understood.The historical receipt of Banko is understood too.

KEY WORDS: illusion, legend, image

一　はじめに

六朝志怪の一つ『捜神記』の「盤瓠」を検定教科書に採録した編集者の意図として、（一）不思議な世界を味わうことで漢文に興味を持ち、（二）女性主人公の人物形象を通して生き方を考え、（三）古くから日本で中国文化が受容されてきたことを知ること、があげられる。分量的には短い作品ながら、これらの点についてよく理解し、漢文理解、さらには自身の人生の糧となるまでに学習しようとすると、結構、大変である。とりわけ「盤瓠」に見られる異類婚姻譚は一見、自明ながら、日本がそれをどう受容したかとなると、それを説明するのは甚だ厄介である。ちなみに、この点を学生に問うと、「バンコがワンコになった」「バンコからポニョが誕生した」など、誤答ではあるが、面白い解答例がかえってくる。解答に窮した学生の、お茶目なそれであったかもしれない。しかし現代の名詮自性だと言われれば、そうかもしれない。バンコとポニョの変身の違いは何かと言えば、聖霊の顕現や、人への変身、魔法など、東西の文化比較も加えて答えることになろうが、簡単にはいきそうにない。本稿では、日本で「盤瓠」がどのように受容されてきたかについて、異類婿と娘との異類婚姻譚の古いもの「三輪山伝説」（『古事記』）から、その派生と考えられる民間伝承説話（または昔話）である「蛇婿入」「猿婿入」、作者自身が「盤瓠」を典拠と明かす『南総里見八犬伝』を通して、日本での「盤瓠」の受容、異類婚姻譚を通した伝統的な日本人の心象を考察する。

二　検定教科書「盤瓠」について

表題の「盤瓠」は、現在使用する教科書（高校２～３年を対象とする検定教科書『新精選古典』明治書院）に載る、『捜神記』の一話である。なぜ『捜神記』が検定教科書に用いられているのか。疑問を感じる人は多いであろう。論語や史記ほどに良く知られているものではなく、また漢文の訓読理解のための教材としては、口語であることに違和感を持つからである。原本もない。しいて言えば、小説（現在でいうところの「小説」でなく、文章というほどのものでない、ただ出来事を記した程度のもの）のため、短い分量で完結し、内容は平易、また「志怪」として用いられる素材は奇抜で面白いという点で、扱いやすいと言えるであろう。さて、『捜神記』が高校生を対象とした教材に使われるのはそれほど以

＊一般科目

前からではないようである。平成九年の大学入試センター試験・国語Ⅰの本試験に出題されてから以降、漢文教材として用いられることが多くなり、受験にあたって要注意とされることもあった。このことは、小川美江氏が「漢文教材としての『捜神記』」で丁寧に説明されている。教科書の採用について熾烈な競争が行われている昨今、「盤瓠」も、大学受験を意識した採録と言えるかもしれない。だが、この出版社は過度に入試対策を教科書編集に示すことのない、比較的穏当な教材選択をしているところであり、それだけが理由ではないと思われる。

それでは右にあげた教科書の編集部はどういう意図を持っていたか。同・指導資料に書かれているもののうち、特に関心を持った箇所を抜粋する。まず「小説」という単元（「盤瓠」「離魂記」の二編からなる）のねらいは、「……中国の言語文化の多彩さに気付かせ、同時にそれが古くから日本人に受容されてきたことを認識させたい。……中国の古典小説は、三国六朝時代から清代までの長い歴史を持っている。その不思議な世界を味わうことを通じて、漢文を読む楽しさを体感させ、漢文に対する興味を深める絶好の機会としたい。……」、また単元の構成として「……女性が主人公、または重要な役割を果たす物語であり、男性中心という印象の強い漢文の世界の中に生き生きと活躍する女性の姿があることも理解させることができる……」としている。選定の理由としては「……内容的に物語を楽しみ、人間の心情を深く考えさせることをねらいとした。……物語を楽しみつつ、登場人物の生き方・決断・心情に気付かせる」とある。つまり、（一）六朝志怪の豊かで不思議な世界を鑑賞し、（二）その人物形象（特に女性の）について考察し、（三）日本でどう受容されてきたかを知ること、それを「盤瓠」を読解させる「ねらい」として捉えることができよう。

具体的に作品を通して、（一）と（二）について、考察する。冗長ともなろうが「盤瓠」全文をあげる。なお引用する『捜神記』の本文は、一般的に入手しやすいと思われる、『東洋文庫10捜神記』（平凡社・竹田晃訳。昭和39年）を用いることとする。（本文の展開をたどる上で、一部改行を変える。）教科書では表題を「盤瓠」とするが、ここでは「蛮夷の起源」である。まず第一段である。

高辛氏に年老いた婦人があった。王宮に住んでいたが、耳の病気にかかって長いあいだ苦しんだのを、医者が治療して、繭ほどの大きさの虫をほじり出した。婦人が帰ったあと、その虫を瓠の種子をいれるざるの中へいれ、盤をかぶせておいたところ、たちまち犬に変わってしまった。その毛なみには、五色の色があった。そこで盤瓠と名づけて飼っておいたのである。

ここは、盤瓠の誕生に関する不思議な因縁が語られるところである。高辛氏は神話伝説上の帝王である。盤瓠が盤古（中国神話の伝説上の神）に通じるものかどうかは不明。山の神の顕現か、神の使いと思われる、婦人の耳より取り出した虫が犬に変身する。「五色の色」や「瓠」など、神仙思想や陰陽五行説を背景に奇怪な事件として表される。続く第二・三段は事件の発端・伏線である。

このころ、呉の地方に住む夷狄の勢力が強く、たびたび辺境へ侵入して来たので、征討のために将軍を派遣したが、敵の大将をとらえることができなかった。そして王は天下に布告を出して勇士をつのり、夷狄の将軍の首を取った者には金千斤を贈り、戸数一万の領主に封じ、さらに姫を与えると約束した。

ところがその後、盤瓠が一つの首をくわえながら王宮にはいって来た。王がよく見ると、それが敵の将軍の首だったのである。どうしたものだろうと相談すると、家来たちの意見では、「盤瓠は畜生でありますから、官位や俸禄は与えられませぬ。また嫁を迎えることもできませぬ。いくら功績があっても、報いる道はないのであります」

戦乱の世を背景に、異民族である敵との戦いに窮する王が、敵の大将の首に、金・領地・娘をその報償として賭ける旨、布告する。盤瓠が敵の大将の首をとってくる。家来たちは一様に反対するが、「武勲の報償」すなわち王の娘は犬に嫁として与えられる。軽薄の布告が「言の咎」となり、異類と人の婚姻を作り出す人馬通婚譚（または人身御供）となる。（金・領地を懸賞とするのはともかく、娘をそれとするのはやはり軽薄である）第四段はその王の娘の形象である。

しかし姫はこのことを聞いて、父親にこう申し出た。「お父上はわたくしを嫁にやると、天下にお約束なさいました。盤瓠が首をくわえて来

て、国家のために害敵を滅ぼしてくれましたのは、天命がそうさせたのでして、犬の智慧や力などでできることではございますまい。王者は言葉を重んじ、覇者は信義を重んずると申します。女ふぜいのつまらぬからだのために、天下に向かって立派に誓った約束を破ってはなりませぬ。それでは国の禍となりましょう」

国・父のことを案じる心優しい娘であると同時に、論理的に物事を捉える利発さと強い倫理意識を併せ持ち、その一方で天命を直覚する霊的な感性も有する。しかし神・巫女といった霊的な存在ではなく、容姿は不明ながら、理想的な人物として、また健気な娘として形象化される。第五～七段は異類婚姻の不思議の叙述である。

王はそう聞いておそろしくなり、姫を盤瓠の嫁に与えた。盤瓠は姫を連れて、南山へと登って行った。草木が生い茂って、人の通う道もないところを行くのである。そこで姫は着物をぬぎ捨て、蛮人のように結髪し、粗末な毛織の着物をつけ、盤瓠のあとについて山を越え、谷にはいり、ある石室の中に住むこととなった。王は姫の身を思って悲しみ、使者を送ってさがさせたが、そのたびに風雨がおこり、山々が震動し、雲が垂れこめて、石室まで行き着くことはできない。

こうして三年の月日がたつうちに、姫は六人の息子と六人の娘を生んだ。盤瓠が死んだのちはその六人ずつが自分たち同士で相手を選び、夫婦になった。そして木の皮をつむいで織り、草の実で染めて着物を作ったが、五色の着物を好み、裁ちかたにはどれにも尾の形がついていた。

その後、母親が都へ帰って王にこの話をしたから、王は使者を出して息子と娘を迎えとった。このときはもう雨は降らなかったのである。子供たちは短い着物をつけ、言葉もよくわからず、しゃがんで飲食をし、山の中を慕って都を嫌うのであった。王はその気持に添うようにと、大きな山と広い沼とを領地に与え、「蛮夷」と呼ぶことにした。

異類婿と人間の娘との間に結ばれた異類婚姻であるが、天の加護があるように神婚の側面も有する。多産（息子・娘各六つの組、十二名は、六曜からきているのであろうか）・異常成長（成長のスピードが速い）の不思議が語られており、外見は人間だが（内実は半分が犬であることを表す）五色の着物・尾の形を残す着物、しゃがんで飲食するといった奇矯な生活の様子に、犬を父に持つ痕跡を表している。姫のその後については不明、また盤瓠の死去した際の事情や様子も不明である。一方、教科書には「『蛮夷』と呼ぶことにした。」の箇所はない。続く、蛮夷を説明する段落も載せていない。「蛮夷の起源」の内容は、「蛮夷」の語が示すように、盤瓠の子供たちを祖とする少数民族を、野蛮な者として否定的に説明するなど、人権の問題からであろうか、削除されている。本来は「始祖伝説」の特性を持っていたのである。

以上に見られる「不思議な世界」とは、①異類婚姻（犬である異類婿と人間の娘との婚姻、人が足を踏み入れることができない奥山の石窟で三年間、犬と姫との夫婦生活がなされる）、②人馬通婚譚または人身御供（武勲の報償として娘が嫁に差し出される等価交換）、③神婚（天の加護を受ける。神隠し）、④子の異常性（多産・異常成長、奇矯な生活習慣）、となろう。また「姫（王の娘）の形象」としては、優柔不断で軽薄な王とその臣下とは正反対に、①利発さ（物事を知的に判断し、理路整然と王を説き伏せる）、②健気で心優しい（王や国のため、決然と、自己を犠牲にして盤瓠の嫁となる）、がその特徴の中心となろう。

三　異類婚姻説話について

異類婚姻をしめす口承・説話は世界的な広がりを持ち、歴史的にも古い。日本でも広く分布し、古くから文献がある。異類婚姻のテーマは口承・説話の中でむしろ中心的とさえ言える。異類婿・異類嫁、蛇や鶴など異類の種類、異なるいくつもの型を持つなど様々なものがある。『捜神記』が成立したと推定されるのは、日本では大和時代が始まる頃で、日本最古に編纂された『古事記』よりも三百年余り前のことである。『捜神記』の「盤瓠」と、日本の異類婚姻に関する伝説・説話との関連は不明だが、『捜神記』が万葉歌にも多くの影響を与えていることは既に指摘されていることであり、古くから日本で知られていることは間違いないであろう。後述するように、馬琴は『南総里見八犬伝』で「盤瓠」が典拠であることを明かしている。「盤瓠」が異類婚姻の重要文献であることを示唆するものでもあろう。さて、異類婚姻について、もっとも古いものの一つに数

えられ、有名であるのは、『古事記』の三輪山伝説（三輪山の大物主神）である。これは伝染病の流行時、天皇の夢告により、意富多々泥古（おほたたねこ）が大物主神（おほものぬしのかみ）を祀って祟りを鎮めたことについて、意富多々泥古が神の子、すなわち蛇神である大物主神と、活玉依毘売（いくたまよりびめ）との神婚によるものであることの記事である。少し長くなるが関連箇所を次に示す。本文は『新編日本古典文学全集1古事記』（小学館。平成9年）を用いる。ルビはくどくならない程度につけた。

　此の、意富多々泥古と謂ふ人を、神の子と知りし所以は、上に云へる活玉依毘売、其の容姿（かたち）端正（きらぎら）し。是に、壮夫（をとこ）有り。其の形姿（かたち）・威儀（よそほひ）時に比（たぐひ）無し。夜半の時に、忽ちに到来（きた）りぬ。故（かれ）、相感（あひめ）でて、共に婚ひ供に住める間（あひだ）に、未だ幾ばくの時も経ぬに、その美人（をとめ）、妊身（はら）みき。

　爾（しか）して、父母、其の妊身める事を怪しびて、其の女（むすめ）を問ひて曰ひしく、「汝（なむち）は自（おのづか）ら妊めり。夫無きに、何の由（ゆゑ）にか妊身める」といひき。答へて曰ひしく、「麗美（うるは）しき壮夫有り。その姓（かばね）・名を知らず。夕毎（よひごと）に到来りて、供に住める間に、自然（おのづか）ら懐妊（はら）めり」といひき。

　是を以（もち）て、其の父母、其の人を知らむと欲（おも）ひて、その女に誨（をし）へて曰ひしく、「赤き土を以て床の前に散らし、へその紡麻（うみを）を以て針に貫（ぬ）き、其の衣（きぬ）の襴（すそ）に刺せ」といひき。

　故、教の如くして、旦時（あした）に見れば、針に著（つ）けたる麻は、戸の鉤穴（かぎあな）より控（ひ）き通りて出で、唯に遺（のこ）れる麻は三勾（みわ）のみなり。爾くして、即ち鉤穴より出でし状を知りて、糸に従ひて尋ね行けば、美和山に至りて、神の社（やしろ）に留まりき。故、其の神の子とは知りき。故、其の麻の三勾遺りしに因りて、其地（そこ）を名づけて美和と謂ふぞ。〈この意富多々泥古命は、神君（みわのきみ）・鴨君（かものきみ）が祖（おや）ぞ〉。

三輪山伝説の異類婚姻は、大物主神である蛇神と活玉依毘売（活は美称、玉依毘売は巫女の意）との神婚であり、毎夜通い続ける、美しい男性に姿を変えた蛇神と、互いにその姿の麗しさに惹かれあうことで夫婦となる。やがて男の正体は衣に刺しつけられた糸をたぐり行くことで判明する。誕生した娘は豪族・三輪君の祖となる。

　美麗の男子に姿を変えた蛇神の通婚（後に男が蛇神の化身であることが判明）、またその対象・性質は、蛇神と巫女との神婚、結末として示される全体の主題は、一族の祖であることを示す始祖伝説、が特徴としてあげられる。これに対して、「盤瓠」では、布告に応じて敵の大将の首をとってきたことによる「武勲の報償」として犬に王の娘が嫁ぎ、深山の石窟で夫婦生活を行う人馬通婚譚、神性を有しながらも女官の耳から現れた虫が五色の犬と化す、いわば妖犬と、王の利発な娘との、因縁めいた異類婚、男女六組からなる十二人の子が「蛮夷」の祖となる始祖伝説となろう。両者は、山に関わる異類婿と、始祖伝説に関しては共通する。また婚姻に至る過程は通婚と、報償として姫を嫁に得る等価交換の相違がある。婚姻する二者は、蛇神と巫女、妖犬と王の健気な娘といった、神性の有無・程度の違いがある。異類婚姻のモチーフを共通に持ちながらも「三輪山伝説」の宗教色の強さと、「盤瓠」の怪異性の豊かさとの違いが明らかである。簡略化すると次のようになろう。

（三輪山伝説）蛇神→通婚→嫁（巫女）の獲得→出産（巫女的な娘）
（盤瓠）　妖犬→等価交換→嫁（姫）の獲得→出産（息子・娘達）

　「三輪山伝説」はその後、「蛇婿入り」として広く分布するようになる。「苧環（おだまき）型」「水乞型」など、「三輪山伝説」とは構造や主題が異なる民間伝承の昔話として語り継がれていくのである。「苧環」とは、「三輪山伝説」で毎晩通ってくる男の衣に糸を刺しつけて後を追い、蛇神であることが判明する、その糸であるが、この昔話では、男の正体を知るまでの展開は共通するが、その後に違いが生じる。蛇の親子の会話から蛇の毒をおろす方法を知った家人のすすめで、蛇の子を堕ろすところに決定的な違いがある。「三輪山伝説」では男の正体を快く受け入れ、巫女的な娘を出産し、後の豪族の始祖となるが、この昔話

では男の正体を忌み嫌い、出産を拒むのである。流産型とも言われる。始祖伝説としての意図は当然ない。これとは逆に誕生した子が偉人となり繁栄する話型もある。その場合、背中や脇の下に鱗があり、蛇であることを徴表する。子孫繁栄型とも言われる。ただし流産型が主流である。次に「水乞型」であるが、「三輪山伝説」の原型が既にないと言えるほどに異なるものである。その梗概については次に『日本伝奇伝説大事典』（角川書店。昭和61年）の解説の一部を引いて紹介する。記事は田中文雅氏による。

水乞の退治型は、田が干上がって困っていた男が娘をやるという約束で蛇に水を引いてもらう。そこで仕方なく娘（姉は嫌がり末娘が承諾）をやることにするが、蛇の棲む池に来ると娘は嫁入りに持ってきた針（小刀）とひょうたん（ふくべ）を投げ入れ、沈めるように頼む。蛇はその針にささって死んでしまうというものである。このあと娘は家に帰り幸せに暮らす型と、長者の息子の嫁になる姥皮型になるものがある。蛇に呑まれようとしていたのを助けた蛙に姥皮をもらう蛙報恩型、助けた蟹が蛇を殺す蟹報恩型、木の上の巣（卵）を取りにきた蛇を鴻（鷲）が嘴でつついて殺す鴻（鷲）の巣型などもある。また、いったんはそのまま蛇の嫁になり里帰りする型がある。（以下、略）

蛇が美男子に姿を変え、毎夜通うのと異なり、蛇がその姿のまま現れ、田に水を引く労働と引き替えに娘を嫁にもらう約束を交わし、三人姉妹の末娘が、困っている父（または祖父）を見かねて、しぶしぶ蛇の許に嫁ぐが、計略により蛇を殺害する。この蛇が猿に代わったものが有名な「猿婿入」である。これも『日本伝奇伝説大事典』の解説の一部を引いて紹介する。記事は小林茂美氏による。

爺（父）が田に水をかけてくれた者（畑打ち、草取りなど）には三人娘の一人を嫁にやるとつぶやく。猿が来て手伝う。爺が娘たちにわけを話すと末娘だけが承諾する。猿が迎えに来て末娘は嫁入りする。以上が発端だが、結末によって話型は大きく二分できる。まず、東日本では、嫁入り後の里帰りに、餅をつき臼に入れ猿婿に負わせる。途中、娘は桜が美しいので採って欲しいと頼む。猿智は臼を背負ったまま木に登り、枝が折れて川に落ちる。辞世の歌をうたいながら猿婿は流されてしまう。娘は家に帰り、幸福な結婚をするという型。

一方の西日本では、嫁入りのとき、猿婿に水瓶を背負わせ、娘は鏡を持つ。娘は、鏡をわざと川に落とし、猿智は水瓶のまま川に入り、歌を残しながら流されてゆく。娘は幸福を得るというものである。

ともに話の最後に、娘の企みで川に落ちながらも猿婿は「猿沢へ落ちて捨つる命は惜しくないあとで姫が泣くが恋しや」と言いながら娘の身を案じつつ流されていく。

蛇婿入り「水乞型」と基本的に構成は同じである。蛇から猿に代わることで、山の神であり、かつ水の神であった神性が低くなるが、川に流されるなど、「水乞型」の影響は残る。労働との引き替えに娘を嫁にもらうこと、それが三人姉妹の末娘であったこと、具体的方法は異なるが、計略をもって異類婿である蛇・猿を殺すことは共通する。しかし異類婿を殺す意志と、殺される異類の哀れさは、猿婿入りに顕著である。

ここまでとりあげた異類婚姻譚は、「三輪山伝説」に始まり、「蛇婿入・苧環型」、「蛇婿入・水乞型」、「猿婿入」へと継がれていったとみて良いであろう。「盤瓠」とそれらの典型的な型を中心に構成比較を簡単に示すと次のようになろう。

（盤瓠）　犬→等価交換→出産（男女六組）→蛮夷の始祖
（三輪山）蛇（美男子）→通婚→正体判明→出産（娘）→豪族の始祖
（苧環型）蛇（美男子）→通婚→正体判明→流産
（水乞型）蛇→等価交換→計略による異類婿殺し→妊娠せず→元に戻る
（猿婿入）猿→等価交換→計略による異類婿殺し→妊娠せず→元に戻る

異類婚姻による子の出産がなくなっていくこと（必然的に始祖伝説としての主題が失われ、別のものに変化する）、さらに異類婿を殺害することが加わることから知れるよう、異類を崇拝の対象としての神・心霊から、嫌忌される対象として殺害・排除するものへと、肯定から否定へ、捉え方が逆転する。娘が心惹かれる美男子から、一度として好まれることのない、自然の状態としてある生の蛇や猿に造形が変わるのも、これに対応する。「盤瓠」の後半である、出産から後の展開は、おおむね「三輪山

伝説」と「蛇婿入り・苧環型」と多くの類似を持っており、それまでの経緯は「蛇婿入り・水乞型」「猿婿入」と多くの類似を持っていると言えよう。逆に「盤瓠」と相違の多い、「三輪山伝説」と「蛇婿入り・苧環型」の出産に至るまでの経緯、また「蛇婿入り・水乞型」「猿婿入」の婚姻後の経緯に見られる、古来の信仰を表す蛇神の形象や、異類婿殺しの発想は、日本的な特徴を持つ内容と言うことができる。類似しながらも異なる点、耳から取り出された虫が犬に変身する怪異や、五色の色を持つ造形（酒呑童子などには同様の造形がみられる）、息子と娘がそれぞれ六組の夫婦となる趣向などは、中国らしい特徴だと考えることができよう。娘の造形という点では、「三輪山伝説」と「蛇婿入り・苧環型」では美貌の娘（利発かどうかは疑問）、「蛇婿入り・水乞型」「猿婿入」は狡賢としての利発さを持つ（容姿は不明）。「盤瓠」の場合は、容姿は不明で、利発、（狡賢どころか）優れた人間性を持つ。やはり類似性を持つ反面、明らかに異なる造形が見られる。このように見ていくと「盤瓠」を巧く取り入れながら、独自の異類婚姻譚を成立させていったと見るのが自然ではないかと思われる。

四　「盤瓠」と「八犬伝」について

伏姫八房に嫁するが如きは高辛氏其女をもって槃瓠に妻すにならへり。

『南総里見八犬伝』肇輯の序で、このように作者馬琴は八犬士をうむ伏姫・八房の異類婚姻が盤瓠の犬祖伝説に依ることを明かす。

以下、「盤瓠」と「伏姫・八房の異類婚」を考察するが、まず八犬士の誕生に至るまでのあらましを、大団円を含めて、浜田啓介氏の梗概（『日本古典文学大事典』岩波書店。昭和59年）を引いて示す。

〔肇輯〕嘉吉元年（一四四一）下総結城城に敗戦した里見義実は郎党杉倉氏元・堀内貞行と共に戦場を逃れて安房に渡った。義実は安房の国主であった神余（じんよ）の遺臣金碗（かなまり）孝吉に擁せられ、神余を簒奪した山下定包（さだかね）を滅した。義実は孝吉に説得されて、助命を乞う定包の妾玉梓を処刑した。玉梓は里見の児孫を畜生道に導き犬にしようと詛いの言葉を吐いて死んだ。孝吉は報仇の志を果した以上、他姓に仕えて後栄を受けるのは忠ならずとして自殺した。義実は安房半国を得て後数年、安西景連に攻められて苦戦に陥った。義実は飼犬八房（やつぶさ）に対して戯れに、敵将景連を咬み殺したならば愛娘伏姫を与えようと言った。その夜、八房は敵陣に至り景連の首をくわえて帰った。かくて里見家はその軍に勝ち、八房を美味錦繍を以て遇したが、八房は伏姫を乞う様をした。義実は八房を殺そうとしたが、伏姫は父を諭し、八房に伴われて家を出た。

〔第二輯〕伏姫は八房と富山の洞窟にあって法華経を読誦し、八房を仏果に導こうとした。二年後、義実は奥方の嘆きに動かされ、伏姫の身を尋ねて富山に登った。金碗孝吉の一子孝徳はかねて義実が伏姫の婿にと擬していた若者だった。折しもその処へ来ていて、姫を救出しようと八房を銃撃した。しかしその銃丸は八房と共に伏姫をも撃倒してしまった。今はの際に、伏姫は八房に身を犯された事のない事を述べ、その証しにと自らの腹を掻切った。瘡口より白気が立ち、伏姫の襟にかけてある八字を彫った水晶の数珠が天に昇り、八つの親珠が光を発して八方に飛散った。孝徳は出家し、ゝ大（ちゅだい）と号し、飛去った八つの玉を求めて遍歴の旅に出た。この八つの玉には、仁義礼智忠信孝悌の八字が現れていた。それぞれ一つの玉を持った八大士が八方に生い立った。……

〔第九輯〕……八犬士は里見家の八人の姫君たちと婚姻し、老に及んで富山に入って仙となった。

「盤瓠」と共通・類似する点は次の通りである。（一）犬の誕生については、義実が殺害した玉梓の怨念の憑く狸に育てられるといった不思議の因縁を持つ。（二）犬が人間の娘を嫁にする経緯については、窮地にあった娘の父が、それを打開する働きをすることと交換に娘を嫁にやる戯れの約束をして、それが現実化する。（三）犬と娘の夫婦生活については、人跡未踏の山中の洞窟でなされた。（四）子供については、多産であった。また犬を父に持つことの痕跡を有する。それぞれ結婚する。

一方、犬の誕生・成長に関する不思議の内容、娘を懸賞とした父の意図・内容、洞窟での様子の記述の有無とその後、姫に関する不思議の因縁、子供の人数・造形・婚姻とその後、など具体的描写は異なり、当然

ながら、それが伝承の一話である「盤瓠」と、読本の大作『南総里見八犬伝』を区別するのであるが、「盤瓠」の基本的な異類婚姻の構成を踏まえながら巧みに作品化したことが分かる。

伏姫と八房、八犬士は次のように造形される。作者によって「富山なる観世音の化現」とされる。生後三年、もの言わぬ病、役行者に八字の文字の水晶の数珠を授与されることなど、異常児として育ち、八房と富山の洞窟に入り、八犬士を生む。しかし、伏姫と八房の富山での生活は、読経する伏姫の傍らで（初めは欲情するものの、やがては）八房がそれに耳を傾ける、純潔なものであり、腹に懐剣をたて、傷口より八玉が飛散することでそれが証される。自害の後は神女となる。死後、八房もまた神犬となる。この異類婚姻は、性的関係を結ぶことのない神婚である。「三輪山伝説」「蛇婿入り・苧環型」の、美男子に姿を変えた異類婿との、性的関係を伴うと思われるそれと区別される。「盤瓠」もまた性的関係を結ぶことのない神婚と思われるが、石窟での様子・犬の死去の様、娘のその後の詳細は不明であり、明らかでない。八犬士は八房と同じ、牡丹様の痣を持ち、それぞれが孤児として辛苦を超え、ゝ大により八犬士が揃い、里見軍を勝利に導き、里見家の娘とそれぞれ結婚し、老いて神仙と化す。里見家に多大な利益をもたらす伏姫・八犬士の、異常児としての形象は、始祖伝説にとどまらず神話的世界へ昇華される。図像学に基づく高田衛氏の文殊菩薩と八大童子、信田純一氏の富士姫をはじめ、数々の典拠の指摘と、それによる伝奇的世界の解明がなされるように、作品世界の広がりを持つ。

「盤瓠」では、王と国のために人身御供となる姫、異類婚姻のもとに異常児として誕生した子供達、彼らは犬の死後、（野蛮と評されながらであるが）広大な所領をもらい安心な生活を送る。神話性を持ちながらも、現実性を有する始祖伝説として捉えられる。これに対して始祖伝説でありながらも神を祀る豪族の始まりとして、異類婚姻による異常児童を積極的に受け入れる「三輪山伝説」は信仰の世界を中心としたものである。一方、「蛇婿入」「猿婿入」はこの異常児童を排除し、また家（社会）の序列・重要度の低い子供を生け贄に利益を得る、過酷な現実性を表す伝承である。これと反対に、伏姫・八犬士は異常児としての過酷な現実を生き抜き、救済される神話的世界が描かれた作品に位置づけられる。

五　おわりに

「異類婚姻」の異常性は、好奇心・信仰心・倫理観に基づくもので、神秘的志向性はもとより、土俗的宗教心、本然的道徳心などの点でも、日本のそれは「盤瓠」に通じる。また「異類婚姻」は子供観を表すものである。「異類婚姻」という異常性を持つ子供を肯定的に捉え、神話的世界の中で、生きることの意味を示し、また反対に、その異常性の故に否定的に捉え、排除する、残酷で厳しい現実性を提示する。伏姫と八犬士は前者であろうし、「蛇婿入り・苧環型」は後者にあたるであろう。「盤瓠」の子供達は、消極的に受け入れられたと言えるであろうか。また功利的で自分勝手、軽薄の父によって、人身御供同然に、異類と婚姻することになる、これらの娘達は、ただ受難ではすまない不条理のなかにある。伏姫も、「盤瓠」の姫も、その健気さが仇となる。哀れな異類の前にずるがしこさが強調される「水乞型」や「猿婿入」の娘も、本来は同様であろう。家にとって必要性が乏しいと判断されたことが推定される末娘が、人身御供にあてられたことがそれを証するであろう。拒否できず、生きるために精一杯の智慧をだしたとも言えるのである。文芸の神話的世界も、説話・民間伝承も、大きな広がりを持つが、「盤瓠」は素材的にも主題的にも、広く日本で受容されるものとして、異類婚姻をテーマとする多くの作品・文献に、直接的・間接的に影響を与えたと言えよう。

参考文献

（1）小川美江「漢文教材としての『搜神記』」（「人間文化研究科年報」(21) 奈良女子大学大学院人間文化研究科 p272～263, 2006）

（2）小沢俊夫「蛇婿入り譚の分析」（「国文学解釈と鑑賞」45(12) p44～51, 1980）

（3）諏訪春男・高田衛編著『復興する八犬伝』（勉誠出版。平成20年）

（4）小松和彦著『異界を覗く』（洋泉社。平成10年）

（5）『日本伝奇伝説大事典』（角川書店。昭和61年）